

# 避難先で覚悟決める住職

## 「先人の歩み受け継ぎ次へ」

### 原発避難の福島・光善寺を訪ねる

#### 東日本大震災から11年

東日本大震災から11年。東京電力原発事故の被災地ではいまだに先の見通せない避難生活が続く。福島県内で唯一続いていた双葉町の全域避難が今年6月に一部解除される見通しと聞き、2月下旬、同町・光善寺の今を聞くため、避難先である同県いわき市小名浜の「分院」を訪ねた。

「久しぶりですね、お元気でしたか」。出迎えてくれた光善寺住職の藤井賢誠さん(52)の口調は、相変わらず穏やかで、まなざしが温かい(写真)。

賢誠さんは、これまでも何度か取材に応じてくれた。前に会ったのは2014年の夏。当時副住職だった賢誠さんと、住職で2016年に88歳で亡くなった父・賢勝さんの一時帰宅に同行し、双葉町の光善寺を訪ねた。同寺は福島第1原

賢勝さんが静かにとなえる讃仏偈が響いた。合わせる手と声は震えていた。

原発事故で故郷を追われた光善寺が幾度かの転居を経ていわき市にたどり着いたのは、震災から2年半後。双葉町から一番近い都市で、門徒も多く避難していたからだ。藤井さん親子は海に近い小名浜地区の住宅街に一戸建てを取得し、その一室を分院の本堂として寺院活動の拠点とした。

現在の分院は、その家から数軒離れた場所に昨年5月に新築されていた。新型コロナウイルスの影響で門徒への披露はまだだが、5月の隆会に開所式を行う予定だという。案内された仏間で賢誠さんは「この11年間、皆さんが集まっての法要や法座は一度もできていませ



原発事故により現在も避難指示が続く福島県双葉町の光善寺

ん。ここで法話を聞いて、お聴聞するのが夢でした」と語った。

8年前の取材ノートには、賢誠さんの悲痛な思いが書き留められていた。原発で故郷を奪われた悲しみと憤り。避難の線引きや賠償の多寡、長引く避難生活によって地縁血縁に亀裂が生まれ、地域や親戚、

る地震で、庫裏は数年前に自然倒壊し、本堂も改修して使用するには時間が経ちすぎた。雑草が生い茂った境内に立つと、「やっぱり、ここでは無理だな」という「諦め」に襲われるという。解体は免れないが、それでも1日でも長く本堂には立っていてほしいと願っている。

「故郷に愛着を持つ高齢世代はいつかは戻りたいと思われ、子や孫などの若い世代は転居先での暮らしが長くなり、もうそこが自分たちの土地になっていきます。そうした皆さんの気持ちの根底にあるのは『諦め』でもあり、『覚悟』でもあると思います」

賢誠さんが口にした「覚悟」という言葉。その奥には、江戸時代、北陸などから移住してきた真宗門徒が、約50年にも及んだ天明と天保の大飢饉で人口が激減した相馬・双葉を救ったという歴史がある。「北陸や各地から移住した私たちの先人は、阿弥陀さまの分け隔てないお心を聞いて、連帯感や先祖とのつながりを大切にして、お念仏とともに厳しい中を生き抜いてきました。念仏者が育んだその歴史は震災以前からも知っていました。こうして故郷を失って、より強く深く考えるようになりまし

た。その歩みを大切に守り、語り伝えていくというのが、原発避難しながら住職を務める私の今の『覚悟』です」。その目には決意が宿って見えた。

最後に賢誠さんは「全国のご寺院、門信徒の皆さまからいただいた励ましとご支援は大変有り難く、強く励まされました。その励ましに支えられ、こうして前に進むことができました」と感謝を語った。

賢誠さんは、避難先で亡くなった家族を双葉の墓に埋葬したいという門徒の依頼で納骨や墓前のおつとめのために月数回、双葉町に帰っている。

そのたびに目にするのが変わり果てた境内。度重